

研究ノート

## ピエール・ロティの『秋の日本』考

### Sur Japoneries d'automne de Pierre LOTI

小倉 和子\*  
Kazuko OGURA

En 1885, Pierre Loti fait son premier séjour au Japon. C'est la guerre de Chine qui emmène ce lieutenant de vaisseau en Extrême-Orient. Dans *Japoneries d'automne* (1889), il décrit entre autres des aspects bizarres de la ville de Tokyo et de ses habitants, dûs à la co-existence de la vie classique et de la vie modernisée ou européanisée du début de l'ère Meiji. Son regard, parfois froid et moqueur, semble cependant être un bon témoin de cette époque, qui se transformait à grande vitesse.

**Keywords:** 日本風物 (japoneries) 紀行文 (récit de voyage) 東京 (Tokyo)  
明治初期 (début de l'ère Meiji) 文明開化 (modernisation)

#### 1. はじめに

『お菊さん』(*Madame Chrysanthème*, 1887) で知られるフランスの作家ピエール・ロティ (Pierre LOTI, 本名 Julien VIAUD, 1850-1923) が日本に滞在したのは大きく分けて2回、1885年の夏から秋にかけての通算3ヶ月と、1900年の暮れから翌1901年の秋にかけての6ヶ月半だった。海軍大尉だった彼は、1885年のときは清仏戦争のためにトリオンファント号の艦長として台湾海峡の澎湖諸島に滞在し、2度目のときも義和団事件の鎮圧のためにルドゥターブル号で中国を訪れ、その合間に何度か日本に寄港した。最初の訪問はロティが35歳のときだった。

軍人と文学者——見相容れなさそうに見える二つの職業だが、ロティにおいてはみごとに両立し、トルコ、ポリネシア、セネガル、日本、中国、インドシナなど、仕事で滞在した地に取材した多くの文学作品を残している。最初の日本滞在からは『お菊さん』と『秋の日本』(*Japoneries d'automne*, 1889) が生まれることになる。とくに、1885年の夏のあいだ長崎で同棲した「おかね」をモデルとした小説『お菊さん』は、文学やと

りわけ美術の領域で流行していたジャポニズムの追い風に乘って、フランス本国でベストセラーになった。

一方、同年秋の滞在は、『秋の日本』と題される一連のエッセーに集約されることになる。ロティは9月半ばから11月半ばにかけて日本海沿岸、神戸、横浜に滞在し、そこを足場にして京都、鎌倉、日光、東京などを訪れ、帰国後まもなくそのときの模様を *La Nouvelle Revue* 誌に発表し始める。ロティは訪れた先々で、何を見、何を感じたのだろうか。本稿では『秋の日本』のなかの「江戸」<sup>1)</sup>の章を中心に、明治初期の日本を訪れた一フランス人の目に映った東京の町を跡づけてみたい。

#### 2. 東京の町並み

「江戸」によれば、ロティの東京見物は、最初の日本滞在の「最終日」におこなわれたことになっている。東海道からはいり、品川、芝の増上寺、浅草の浅草寺、上野公園や寛永寺を見て、夕方、吉原に立ち寄ってから深夜の列車で横浜に戻った。交通手段は、浅草までの一部区間で鉄道馬車を使った以外は、すべて人力車と徒歩であった。

\* 立教大学観光学部教授

このエッセーの冒頭には、「12月5日、日曜日」という日付がある。しかし、クロード・マルタンによれば、12月5日が日曜日なのは1886年であり、ロティは前年11月17日に横浜を発っているのだから、東京見物をしたのは11月15日の日曜日だったはずだ<sup>2)</sup>、ということである。日付は紀行文により真実味をもたせるための手段にすぎないとすれば、実際にロティが東京を訪れた日を特定することはさして意味がないのかもしれない。しかし、この訪問が秋の終わりというよりは、すでに冬が目前に迫った寒さのなかでおこなわれたという点は重要だ。じっさい、石の建造物を見慣れた西洋人の目には、「紙でできた小さな家々」、すなわち窓に障子しか張られていない木造家屋で冬の寒さに耐える日本人の気が知れなかったようである。「低くて灰色がかった、似たりよったりの小さな家々が果てしなく (p.146)」続く東京の町は、おそらく気候のせいもあって、そうとう陰気に映ったようだ。

### 3. 文明開化の東京

1885年(明治18年)の日本といえば、文明開化によって必死に西洋の近代思想や生活様式を取り入れようとした風潮がようやく一段落したかどうか、という時期である。伝統的な日本の衣食住を墨守するわけにはいかず、かといって新しく取り入れたものはまだ板につかず、といった中途半端さがいたるところで目立っていたにちがいない。日本にわざわざ西洋の物まねを見に来たわけではないロティの視線は、そのような日本の現状にたいして冷たい。

「今日は日曜日だ。そのことははっきりとわかる。彼らは異教徒だというのに、われわれの日曜日のふるまいや退屈さを物まねし始めている。(p.146)」

キリスト教徒でもないのに、日本人が西洋のまねをして日曜日を休日とし、商店を休み、家族で盛装して散歩に出かける姿を見るのは複雑な心境だろう。「まねる」という動詞には、「猿(singe)」から派生した《singer》というフランス語が使われていて、《imiter》よりも「猿まね」の意味合いが強い。この《singer》《singe》という語はよそでもたびたび使われていて、日本が古来の生活を捨てて西洋化することへの不快感がこめられている。

西洋料理店にたいしても厳しい。料理そのものが美味しくなかったり、冷めていたり、という批判は、当時の技術からみてやむをえないだろう。しかし、テーブルで、フォークを使って食事をしているにもかかわらず、部屋そのものは「小びとの国のように小さく(lilliputienne)」て、天井も低く、窓には障子のかわりにガラスがはめこまれ、カーテンが掛かっているが、そこから見えるのは奇妙さきまりない箱庭だけだ(p.149)、と指摘するあたりは、過渡期の日本にたいして少々寛容さが欠けているといわざるをえない。ロティによれば、「近代日本のさなかにいるということは、みじめなまでに異様で滑稽な日本にいる(p.149)」ということなのだ。

また、夫婦と3人の娘によって切り盛りされているこのレストランの正直で家庭的な雰囲気は評価するが、そのすぐあとには「でも、引っかかっているとはいけない」という言葉がつづき、「どこでもそうだが、ここでもやはり、人は物と同じように売り物で」あり、「芸者」との違い引きをとりもってくれるのだ(p.149)、と読者に伝えている。

ロティの日本批判は、この「引っかかるまい」という意識の裏返しともとれる。京都、鎌倉、日光、東京など、『秋の日本』のなかで彼が訪れた場所のうち、東京にはとくに批判の矛先が向けられているように思われる。最初の3つの場所では、伝統的な日本の名所を見物することが目的で、訪れた場所や時期のせいもあって、一般の人々と接する場面はごく限られていた。それにたいして、東京では和服と洋服、和食と洋食、古くからの民家と近代的な西洋建築が混在するなかで、一般市民との接触も多かった。そのような事情が各章の語り口のちがいになってあらわれているのではないだろうか。よそ者たる西洋人と現地人である日本人とのあいだの微妙な摩擦が緊張関係を生み、それが日本人にたいする評価にも影響を及ぼしているように思われる。

### 4. ロティの目に映った日本人

なかでもその批判の矛先は商人などの都市生活者に向けられる。ロティは浅草で土産物を見つくり回しているときのことを次のように回想している。

「このような愚かなふんどくり、たいした値段でもないのに、ひっきりりそうなお人好しかどうか

を横目で見極めながら陰険にふっかけてくるやり方、あのお愛想笑い、四つん這いのお辞儀、心のこもらないばか丁寧などにわたしがこれほどいらだったことは、未だかつてなかった。(p.151)

金持ちの外人を見ればカモにすることばかりを考えてその卑屈さを省みず、しかも外見はあくまで慇懃な商人たちにたいするいらだちや警戒心が頂点に達した一節だといえよう。そして、そのいらだちは、日本人の身体的外観にたいする露骨な攻撃にまでエスカレートする。

「この国の人間の醜さがわたしをいらだたせる。とくにその小さな目、互にくっついたやぶにらみの小さな目が。(p.151)」

日本人の身体的特徴に向けられた(したがって、向けられた当人としては如何ともしがたい)不条理な批判は、とりわけ都市で働く男たちに向けらる。ロティは文明開化を迎えてもあいかわらず和装を続けている一般女性にたいしてはそれなりに好意的だし(p.151)、農民にたいしても、背は低いながらたくましく、白い歯と鋭い眼光をもっていると一定の評価を下している。だが、商人や著述家や工芸家など、都市に住む男たちにたいしてはまことに手厳しい。町を歩いていてジロジロ見られたり、買い物をして高くふっかけられた経験など、外国人慣れしていない国で味わわざるをえなかったさまざまな不快な経験がそこには影響しているのかもしれない。しかし、それと同時に、和服に草履をはきながら、散切り頭には山高帽をのせた姿や、おそらく目が小さいことへのコンプレックスもあって猫も杓子もかけていた眼鏡による外見の救いがたいまでのちぐはぐさがもっともストレートにあらわれていたのが、都市部の男たちだったということだろう。そうした和洋折衷の奇妙さは、ロティより数年早い1882年(明治15年)に日本に到着し、1899年(明治32年)まで滞在したフランスの風刺画家ビゴー(Georges-Ferdinand BIGOT, 1860-1927)の作品などにも、視覚的証言として(ロティよりずっとユーモラスにだが)数多く残っている<sup>3)</sup>。

西洋人を挑発する意図はないにせよ、西洋の物まねをして彼らにいわば近親憎悪の念を吹き込んでしまう日本人も日本人ならば、西洋の仲間入りをしようと必

死になっている日本人のことを寛容に受け止めず、「野獣、黄色人種(p.152)」呼ばわりするロティもロティだ。彼の気むずかしさを差し引く必要もあるだろう。しかしその上で、ロティの証言が、当時の西洋と東洋の接触が強いた緊張感を測る材料を提供してくれていることはまちがいない。

## 5. 名所めぐり

人間描写の筆致に比べると、東京の名所を同国人に紹介するロティの筆致はだいぶ穏やかである。最初に訪れた芝の寺町で、「聖なる林」や寺そのものの荘厳さを日光東照宮のそれになぞらえながら、廃仏毀釈運動の影響で荒れるに任された現状を嘆くのは、一西洋人としてきわめて自然な反応だろう。

また、おそらく今も昔も、東京を訪れる外国人観光者にもっとも人気がある浅草では、着物を着て、髪を結い、かんざしをつけた「ひょうきんな娘やきれいな娘(p.153)」の一行にしばし魅入り、仲見世で売られるからくりのおもちゃや置物のたぐいを眺めたあと、参拝に向かう。しかし、「瞑想はわずかししかおこなわれず(p.154)」、音の洪水—両替屋、仏画や教典や花を売る人たちの声、駆け回る子どもたち、鳩の羽ばたき、賽銭箱に投げ入れられる小銭などの音—が神聖な場所を侵しているという指摘はやはり、この種の光景にあまりに慣れっこになっているわれわれではなく、キリスト教文化圏からの訪問者ならではの観察眼によるものというべきだろう。

人力車は浅草をあとにして、上野へと向かい、夕闇が迫るころようやく到着する。まずはともあれ、蓮池(不忍池)が見下ろせる高台に足を止める。ここからの風景描写は「江戸」のなかでもっとも絵画的である。

「蓮池は今夕、いくぶん曇った鏡のように、夕陽のすべての黄金色を反射している。江戸はその静かな水の背後にある。江戸は秋の夕暮れ時の褐色の霧のなかに半ば埋もれて、向こう側にある。皆似たりよったりの無数の小さな屋根。それらのうちの最後のものは、ぼんやりとした地平線にほとんどかき消されているが、これで全部ではないという印象、見えない遠くにまだまだ続いているのだという印象を与えている。(p.157)」

上野の丘から東京の町を一望する。それも、うつす

らとかかった夕靄のなかで。「江戸を魅力あるものにするには隔たりと特殊な照明が必要だ (p.157)」というロティは、絶好の時刻にここに到着したようだ。

「江戸は類い稀な色調のなかにほんやりと浮かびあがっている。それは実在しない幻影であるかのように見える。まるで長いバラ色の綿の帯が、この蜃気楼のような町をその襷のなか、やわらかいうねりのなかに包み込みながら、地上でゆっくりとほどけていくかのようだ。もはや池と、遠くの無数のものが立ち並んでいる向こう岸との境目はわからない。(……)そしてこのたなびいている長い帯の上、海の景色のそれと同じくらい単調で平たい長い線の上には、フジヤマ火山の端正で、孤独で、比類ない大きさの円錐形が、計り知れないほど遠くに、空の茶褐色のなかにぶら下がったようになって見えている。雪でバラ色に染まり、死に絶えようとしている地上の他のものたちのあいだでまだまばゆいばかりに輝きながら。(p.157-158)」

はるか遠くに富士山を見やるこの風景は、ほんとうにロティが自分の目で見たものだろうか。いや、むしろ浮世絵を眺めながら長年自分の頭のなかに培ってきたイメージに重ね合わせて確認された現実ではないだろうか。

このような俯瞰に比べれば、庶民の憩いの場所である上野公園など、どこの都市にでもある平凡な公園にすぎず、ほとんどロティの興味を引かない。上野で唯一彼を引きつけるものといえば、徳川家の墓のある寛永寺の黒々とした丈高い杉林の静けさと、その静けさを破って鳴くカラスたちが醸し出す神秘的な雰囲気である。

さて、夕の帳が落ち、寒さもますます厳しくなってくる。上野にたくさんある西洋料理店の一軒で夕食を済ませたロティは、このまま帰ろうか、それとももう少し夜の東京をさまよおうか、と思案する。なにしろ、今日が、ふたたび訪れることのないであろう日本滞在の最終日なのだから。結局、彼は、外国人のお決まりの観光コースの一つである吉原に行ってみることにする。といっても、彼はこの日本で「もっとも尊重に値する社会的制度の一つ (p.162)」を「たんなる訪問者 (ibid.)」として見物する以外に他意はない、と断るこ

とを忘れない。人力車は待ってましたとばかり車を飛ばす。

幅の広い道の両側に並び、正面を明るく照らし出された大きくて豪華な家々、どこからともなく聞こえてくる三味線の調弦の音、格子の内側に整然と並ぶ着飾った遊女たち、これは一つの「スペクタクル」だ。ロティが思い描いてきた日本は、西洋の模倣が板につかない、近代化した東京ではなく、このような、古くはあっても豪華な町並みや衣裳のなかにこそあったのだろう。

## 6. おわりに

「江戸」とともに京都、鎌倉、日光などについて語る『秋の日本』の各エッセーを通読すると、ロティの一定の好みははっきりしてくる。彼には、日本人が暑さをしのぐ手立てはいろいろと講じて、寒さにはいたって無頓着なのが理解できない。黒ずんだ小さな平屋がどこまでも続く都市景観には批判的でも、大きくて豪華な家々が建ち並ぶ吉原やその遊女たちのきらびやかな衣裳は美しいと感じる。また、野良仕事に従事するたくましい男性は評価するが、青白い顔で貧相な体格をした都市生活者には侮蔑の眼差しを向ける。寺院やそれを取りまく杉木立が生み出す神聖な雰囲気には惹かれるが、ヨーロッパ流を中途半端に取り入れたものは揶揄する……。要するに、彼の日本観はジャポニスムによって植え付けられた、江戸時代の太平が生み出した審美観だったのではないか。

また、ロティが植民地を次々と拡張していった第三共和制を体現する人の一人だったという点も留意すべきだろう。彼は、19世紀前半のロマン主義の作家たちのように彼方の世界への絶対的な憧れをもっていたわけではない。海軍の軍人として多くの地に赴いた経験から、それぞれの土地を冷静に比較検討するだけの余裕をもっていた。そして、その視線には当然のことながら、軍人として、それも海軍大尉として、物を外部から対象化し、分析する性癖が備わっていたはずである。しかし、そうしたスタンスから異国を描き出すことで世間的な成功を収め、1892年には史上最年少でアカデミー・フランセーズ入りを果たし、1923年に生涯を閉じたときには国葬にまでなったということは、彼が良い意味でも、悪い意味でも、第三共和制の体現者だったことの証左であろう。いずれにせよ、鋭い観察眼に基づき、歯に衣させぬ筆致で書かれた東京紀行

が、急速に変貌する当時の都市にたいする外の目からの貴重な証言であることにちがいはない。

#### 注

- 1) Pierre LOTI, 《Yeddo》, dans *Japoneries d'automne*, Kailash Editions, coll. 《Bibliotheca asiatica》, 2000. 以下、同書からの引用は、直後にページ数のみを記す。
- 2) *Pierre Loti, Voyages (1872-1913)*, Édition établie et présentée par Claude Martin, Robert Laffont, coll. 《Bouquins》, 1995, p.1469, note 40.
- 3) 清水勲編『ビゴー日本素描集』(岩波文庫、1986年)、同『続ビゴー日本素描集』(岩波文庫、1992年)、『明治の面影・フランス人画家ビゴーの世界』(川崎市市民ミュージアム／伊丹市立美術館編集・発行、2002年)などを参照。

#### 参考文献

- ・遠藤文彦『ピエール・ロチー珍妙さの美学』法政大学出版局、2001年。
- ・岡谷公二『ピエール・ロティの館』作品社、2000年。
- ・ピエール・ロティ『アジアテ』(工藤庸子訳)新書館、2000年。
- ・ピエール・ロチ『お菊さん』(野上豊一郎訳)岩波文庫、1988年(2003年復刊)。
- ・ピエール・ロチ『氷島の漁夫』(吉水清訳)岩波文庫、1978年(2002年復刊)。

\*この研究ノートは2002年度立教大学観光学部プロジェクト研究費による研究「フランス文学と風景」の一部である。